

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：37402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02464

研究課題名(和文) 韓国の小説と映像文学に現れている東アジア市民意識研究

研究課題名(英文) A study on the consciousness of East Asian Citizen in the Korean novels and the image literature

研究代表者

申 明直 (SHIN, MYOUNGJIK)

熊本学園大学・外国語学部・教授

研究者番号：50389524

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：日本による植民地期以来、東アジアから朝鮮半島への移住、朝鮮半島から東アジアへの再移住を行った人々を描いた韓国の小説と映像文学を分析してみると、新旧華僑華人が各時期別に多様な東アジア市民意識を形成し変貌してきたことが分かる。まず、植民地期には「植民地型中間市民」としての地位を持つ動員された東アジア市民に、戦後の開発/階級独裁期には、移住先となった国家より同化を強要されたが、市民でありながら市民としての権利を保持しない市民、即ち「同化型類似市民」に、中国の改革開放以後は、旧華僑華人の帰郷と中国朝鮮族を含む新華僑華人の離散を繋げる「中華型ネットワーク市民」に変貌してきたことなどが把握できた。

研究成果の概要(英文)：An analysis of the Korean novels and imaginary literature since the Japanese colonial period depicting migrants who migrated from East Asia to the Korean Peninsula and vice versa, shows that both new and old Chinese overseas have transformed the consciousness of East Asian citizens at different times. And that the image of the Chinese overseas has changed, from the mobilized East Asian citizen who was the "colonial middle citizen", in the colonial era to the East Asian citizen who is not a real citizen but a citizen who does not retain rights as a citizen, that is the "assimilated ersatz citizen", and during the postwar development/class dictatorship was forced to assimilate to the nation which was the migration destination. This is followed by the "network citizen under the Chinese centralism" who is a link between the homecoming of the old Chinese Overseas and the diaspora of the new Chinese Overseas, a group which includes those of Korean-Chinese ethnicity.

研究分野：人文学

キーワード：東アジア市民 中間市民 類似市民 ネットワーク市民 華僑華人 韓国文学

1. 研究開始当初の背景

韓国は、東北・東南アジアからの多くの移住民と共に多文化社会を形成しているが、これは韓国だけではなく、台湾・タイ・シンガポールなど、東アジアの国々において共通してみられる現象である。韓国では、このような現象について超国家論と多文化論等に基づく多様な分析が行われているが、現象の分析を越えた、構造分析、特に「東アジア市民論」に基づく体系的な分析はまだ行われていない。本研究は、国境を越える移動と定住が繰り返されている現象について、東アジア市民意識に焦点を当てて、韓国の小説・映像文学を対象とする分析を進めた。特に、中国、韓国、台湾、日本等の「東北アジア」地域、主な移住労働力の送出し国であるベトナム、インドネシア、カンボジア等の「東南アジア」地域のそれぞれにおける、東アジア市民意識およびコミュニティ形成過程に注目して研究に取り組んだ。

2. 研究の目的

本研究は、韓国の小説および映像文学を通じて、東アジアの多様な国から来た人々が、それぞれの国家の「国民」であることを越え、どのように東アジアを横断する「東アジア市民」となっていくのかについて考察したものである。東北アジア・東南アジアから韓国など他の東アジアの国に移住した者が、どのように新しい成員権を獲得していったのか、また、どのように開かれたトランスナショナルな東アジア市民としてのアイデンティティを形成していったのかについて考察した。

特に、戦前、中国から、韓国など他の東アジアの国へ移住して行った人々が、移住先の住民とどのような関係を構築しながら自らの成員権を形成していったのか、戦後、中国の朝鮮族をはじめとする移住民たちが韓国や東南アジアの国々に移住した際に、どのように国家を横断するコミュニティを形成し、東アジア市民として成長していったのかについて考察した。

3. 研究の方法

- (1) 中国の華僑華人1世が現在もなお集住している韓国の仁川チャイナタウンと、変化を遂げた形態で残っているソウル小公洞および延南洞、中国朝鮮族をはじめとする新華僑華人の集住地となったソウル加里峰洞および大林洞等における実地調査を実施し、また関連作品を分析した。
- (2) 中国山東省から仁川や大邱のチャイナタウンへ移ったのち、韓国の開発独裁過程でアメリカLA コリアタウン等へ再移住した旧華僑華人の集住地と、中国の東北3省から韓国へ移ったのち、再び中国山東省の青島へ移り、その後中国内陸や東南アジア等に再移住した新華僑華人(中国朝鮮族等を含む)の集住地の実地調査および関連作品の調査分析を行い、東アジア市民意識の変貌過程を考察した。
- (3) 階級独裁が行われたインドチャイナ半島のベトナム、ラオス等での東アジア市民意識調査、日本で東アジア共生関連映画を上映する「東アジア市民共生映画祭」や「新大久保映画祭」でのシンポジウムや討論会等を通じて、関連研究者らのネットワークを構築した。

4. 研究成果

- (1) 植民地期の東南アジアおよび朝鮮における東アジア市民意識の形成・変貌過程を調査分析した結果、植民地期における華僑華人は「中間市民」の地位を持つ動員された「東アジア市民」であることが明らかになった。東南アジアにおける華僑華人の場合、西欧植民地期には西欧と先住民の間の「中間市民」であったが、戦前の日本統治期にはその「中間市民」としての地位を原住民に奪われるようになった。李泰俊の小説「農軍」の舞台となった「万宝山事件」および事件以後の植民地期の朝鮮で発生した華僑華人虐殺事件は、植民者である日本が、植民地の朝鮮からの移住民である朝鮮人および満州地域の先住民である中国人を「分割統治」しようとした過程、つまり満州地域の植民者であった日本人が、その地域における朝鮮人を、当該地域の先住民である中国人との間の「中間市民」に位置づけようとした過程において発生した事件であるといえる。

- (2) 開発/階級独裁期の韓国および東南アジアにおける華僑華人の東アジア市民意識を分析した結果、かれらはそれぞれの移住先となった国家の国民になることを強要されたものの、求められた国籍を取得しても完全な国民になることのできない「類似市民」であったことが明らかになった。仁川チャイナタウンを描いた韓国映画『子猫をお願い』の中で、韓国に定着し暮らしている華僑華人1世は、かれらの孫である華僑華人3世の双子「沸流」と「温祚」を受け入れない。これは、開発独裁期の韓国においてとられた、華僑華人2世に対する排除政策と無関係ではない。東南アジアの開発独裁期における華僑華人もまた、同化を強要され当該国家の市民となるも、市民としての権利を持たない「類似市民」の地位に留まらざるを得なかった。階級独裁期におけるインドチャイナ半島の華僑華人も、開発独裁期の華僑華人と同様に、市民としての権利を持たない「類似市民」の地位に置かれていた。

- (3) 中国の改革開放以来、韓国をはじめとする東アジアに移住した中国朝鮮族等の新華僑華人のトランスナショナリティを分析した結果、旧華僑華人およびかれらの資本の中国への帰郷と、新華僑華人の脱中国ラッシュという、中国を媒介として新・旧華僑華人が繋がる中華型「ネットワーク市民」が誕生したことが明らかになった。韓国における新華僑華人の大半を占めている中国朝鮮族の場合、初期は「短期居住型」単純労働移住が多かったため、韓国映画『黄海』、『新世界』、『阿修羅』、『ミッシング：消えた女』等に登場する新華僑華人のイメージは残酷な犯罪者像が主流であった。しかし、新華僑華人による移住・越境の類型はその後、「留学永住型」専門技術労働移住、韓国の済州道においてみられるような「資本投資型」へと次第に変貌していった。新華僑華人は、居住国の再中国化現象と共に既存の「類似市民」から脱皮し、居住国の先住民との和解による三語疎通可能型東アジア市民となった。

- (4) 韓国の映像文学に表れる東アジア市民意識に関する研究者ネットワークを構築することがで

きた。「東アジア市民共生映画祭」や「新大久保映画祭」においては、韓国の開発独裁期における労働者から、今日カンボジアの韓国工場で働く労働者までをも対象にした映画『危路工団』等の上映、討論会・シンポジウム等の開催を通じて、映像文学を媒体とする東アジア市民意識の研究者ネットワークを形成することができた。韓国の聖公会大学における、「東アジア市民社会を志向する韓国」をテーマとするシンポジウムの企画、中国の青島・上海に移住した中国朝鮮族および米国 LA・サンフランシスコにおける「留学永住型」専門技術型労働移住民等の調査研究を通じて、日中米韓の研究者ネットワークを形成することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

申明直、植民型「中間市民」から同化型「類似市民」へ、石堂論叢、査読有、第70巻、2018年、379～425頁 (ISSN 1736-6578)

申明直、中国改革開放前後の華僑華人と東アジア、東アジア共生文化研究、査読無、第4巻、2017年、20～40頁

[学会発表](計7件)

申明直、華僑華人の変貌と「東アジア市民」の形成、韓国朝鮮文化研究会、2017年

申明直、イギリスとクマガクとフェアトレード大学、東アジア共生ブックカフェシンポジウム、2017年

申明直、東アジア共生カフェ・フェアトレード大学、熊本市国際交流会館啓発セミナー、2017年

申明直、韓国映画の窓から見たアジア、福岡韓国教育院、2017年

申明直、新大久保におけるアジア共生と社会的企業、新大久保映画祭シンポジウム、2016年

申明直、東アジア共生映画と東アジア共生村の生態系、2016世界人権都市フォーラム、2016年

申明直、中国開放前後の華僑華人と東アジア、東アジア共生シンポジウム(韓国聖公会大学)、2015年

[図書](計1件)

申明直(代表執筆・編著)他8人、風影社、東アジア共生市民社会、2018年(予定)、約250頁

[その他]

新聞掲載、ホームページ等

「スクリーンに壁はない：日韓文化深まる映画祭」、『熊本日日新聞』(2017.11.2)掲載

「尹東柱の生涯、九州初上映」、『熊本日日新聞』(2017.10.19)掲載

「東アジア市民共生映画祭、「危路工団」を日本初上映」、『熊本日日新聞』(2015.10.1)掲載

<http://shinmj.witheastasia.org>

<http://film.witheastasia.org/>

<https://www.facebook.com/film.witheastasia.org>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

申 明直 (SHIN MYOUNGJIK)

熊本学園大学・外国語学部・教授

研究者番号：50389524

(2) 研究協力者

盧 恩明 (NOH EUNMYOUNG) 熊本学園大学・非常勤講師

辛 教燦 (SHIN KYOCHAN) 崇城大学・非常勤講師